図書記号—著者記号表の展開法

Book Number—A Expansional Method of Author Table

群馬大学医学部図書館
(現群馬大学工学部図書館)

金井 義明*

要 約

著者記号表によって図書記号をつけると、同一分類のなかで、別の標目の図書でも、同じ図書記号となることがしばしばあります。この展開方法は、このような異標目同図書記号を避けるためのものです。展開の方式は、1から9までの自然数を1から大きい方へ順にならべます。これを有限等差部分数列として考え、アルファベットの順序に合わせて、この部分数列の区分された中央の数を選択していく方法です。そして、この結果、図書の排列がアルファベット順となるよう考えてあります。

1. い き さ つ

請求記号のうちで、図書記号は分類記号にくらべて安易な記号として考えがちである。しかし、請求記号は検索記号でもあり、図書の検索・排列・出納など機能的な面を考えると、図書記号もやはり重要な記号要素である。

当館では、図書記号として受入著者順法を使用していた。しかし、この方法では合理的な秩序が無いこと、及び作業能率が蔵書冊数増加に伴ない年々低下すること、などの欠点がある。そのため、受入著者順法に比較して作業能率が高く、より合理性のある日本著者記号表により図書記号を付けることにした。

採用にさきだって運用を検討してみると、当館で使用している分類法BMLCは細目が粗いこと、展開性がないことなどの理由により、同分類記号の別個の図書の間で、同じ図書記号となってしまうことがしばしば起る。それで、異標目同図書記号となることを避けるために、著者記号表を展開することにした。

2. 図書記号と分類法との関係

分類法によって分類細目総数に差がある。分類細目総数の大きい分類法ほど同一分類記号となる図書は少ない。分類細目総数の小さい分類法ほど同一分類記号となる図書は多くなる。そして、図書記号の役割も増大し、それにつれて異標目同図書記号となる図書の冊数も多くなる可能性をもつ。分類法と図書記号の必要詳細度とは、逆相関の関係にある。

3. 図書記号の意義

図書記号は同一分類記号をもつ図書を個有化するためのものである。そして、個有化することの目的は、図書の排架(排列)、位置(順位)をも指定することにある。また、図書記号を検索・出納等の運用面からみると、分類記号の補助記号としての役割をしている。排列は、秩序のある排列方法が、無秩序な方法よりも当然すぐれている。排列方法は図書記号法によって決る。

4. 図書記号法について

図書記号法には、固定法としての受入順と、相関法としての著者順と年代順とに大別できる。この二つの方法を比較してみると、図書の検索・排列・出納の機能すべてにおいて相関法がすぐれている。つぎに、固法法のなかより受入著者順、相関法のなかより著者順(著者記号表による)をとりだして比較検討をした。

5. 受入著者順記号法

受入著者順記号法は、単なる受入順記号法よりも一段階進んだ記号法である。同一著者の著作が一ヶ処に集中する。しかし、図書記号の順序に合理性がない。まったくの偶然による受入順序によって図書記号が決定し、それによって図書の排架の位置は決定する。同一分類記号

* Yoshiakira KANAI: Medical Library, Gunma University
(昭和52年12月29日受理)

内での同じ頭文字となる確率は非常に高いものである。同一分類記号中で、図書記号が同じ頭文字となる図書が多ければ多いだけ、書架から目指す図書を捜し出すのが困難となり、あらかじめその図書の目録カードを検索して図書記号を知っていないと、目的とする図書を捜し出せない状態になります。すなわち、その図書の図書記号を調べた上でないと捜せないという形式になっているということであり、検索手段が一つしかないということです。また「受入順」ということは、前にどれだけ受入れしてあるかを調べる必要があるということの意味しています。すなわち、先に受入れられた図書は必ず何等かの形で請求記号をつけておかないと、次に受入れる図書の図書記号をつけることが出来ないということです。また、このことは、図書が年々蔵書冊数を増せば、それに伴ない相関的に一冊づつの受入れ手続時間が長くなることも意味しています。すなわち一冊の本を受入れるのに、だんだんより多くの時間を必要とするということです。これは、蔵書中の同一区分（同一分類）中のすべての目録カードの見なおしが必要ということです。ただし、区分数（分類細目数）が多ければ多いほど、見なおす目録カード枚数は少なくて済みます。ここで、 x をその年度の受入冊数、 y を蔵書冊数、 z をその図書館で使用している分類の総細目数とすれば、その年度末受入完了時には、その年度中の受入れた図書の目録も排列して、見なおしをしているわけです。受入れの第1冊目は蔵書冊数分だけの見なおし、第2冊目は蔵書数に第1冊目の目録カードを見なおすことになる。そして、その年度最後の一冊目は、その年度の受入冊数より1冊少ない冊数と蔵書（前年度分までの）冊数を見なおしているわけです。すなわち、

$$y + (y + 1) + (y + 2) + \cdots + (y + (x - 1))$$

と、なります。

これは、受入冊数分の回数だけ見なおすわけだから、項数は x 項あることになります。

よって、

$$\frac{x}{2}(2y + x - 1) = \frac{x(2y + x - 1)}{2}$$

と、なります。

ただし、区分数（分類総細目）が多ければ多い分だけ、見なおす冊数は少なくて済みます。

よって、

$$\frac{x(2y + x - 1)}{2z} \cdots \cdots (1)$$

という式が成立します。

ここに、蔵書冊数7万冊、分類総細目1,000項目、年間受入冊数1,000冊の図書館があるとすれば、

$x = 1,000$, $y = 70,000$, $z = 1,000$ を(1)式に代入して、70,444.5冊分の見なおしをしていることを知る。翌年もまた、1,000冊受入れをしたとすれば、71,444.5冊分の見なおしが必要になる。年々、見なおすカード枚数が、いかに増加するかが、これで知ることができます。

図書館では、受入順図書記号法は言うに及ばず、受入著者順図書記号法も使用すべきでないことが、以上により、理解することが出来ます。

6. 著者記号表による図書記号法

著者記号表を使用すると、先に受入れられた図書によって、図書記号が変えられる度合いが少なくて済みます。また、図書記号作成上の作業能率が高い。検索しやすく、捜しやすい。また、目録カードから検索することのみならず、標目がアルファベット順に並んでいるので、排架位置の順を追えば、その本を容易に見つけられます。すなわち、検索手段が二通りあるということです。以上により、著者記号表による図書記号法が受入著者順記号法よりも優れていることを確認できます。

7. 1 著者記号表による著者記号の必要性

医学系専門図書館では、受入れる図書がその図書館で使用している分類法の或特定項目に集中しやすい。このため、著者記号表による図書記号法に依っても異標目同図書記号になることがしばしば起る。すると、図書記号の番号が、アルファベットの順序に従がわない場合が起る。そのような、異標目同図書記号を避けるのみならず、正しい排架順序に基づいた展開が必要であると考えらる。

7. 2 この展開法の意図

この展開法は、その図書館で使用している排列の順序を乱すことなく、異標目同図書記号となることを避けることにある。すなわち、排列の順序を維持することを目的としている。著者記号表は図書記号がアルファベット順に従うように構成されている。それを受け、この展開法はたとえ著者記号表において同じ図書記号となるべき図書が受入れられても、著者記号を展開させてアルファベット順を乱さないように図書を排列させることを目的としている。

7. 3 展開の骨子

展開方法は、1 から 9 までの自然数を 1 から大きい方へ順にならべる。これを 1 から 9 までの有限等差部分数列として考えます。まず、第 1 番目のものはこの等差部分数列の中央にある数 5 を選択する。つぎに、第 2 番目のものは、アルファベットの順序に照らして、第 1 番目に選択した 5 の図書よりも前の順位か後の順位かを鑑み、その属する部分の部分数列の端の数すなわち 1 また 9 と 5 との中央に当る数を選択する。第 3 番目のものは、その属する順位が選択済数どうしの間にあれば、その中央に当る数を選択し、もし、選択済数とこの部分数列の端の数との間にあれば、その選択済数と端の数の中央に当る数を選択する。第 4 番目のもの以下、同様な方法で数を選択していく。もし、小数点以下の展開が必要な場合は、0.1 から 0.9 までの小数点下の有限等差部分数列を設定して、上記と同様な展開方法をおこなう。

7. 4 著者記号表の展開

ここで展開するということは、著者記号表より選び出された著者記号に数を付けて図書記号を構成することである。それから、この展開は同一分類記号を指定した図書のあいだにおいて、ということが前提となっている。

〔1〕 著者記号表から選び出された記号の末尾に 5 をつける。（第 1 冊目）

〔2〕 次に、既に受入れられている図書の標目とは異なる標目であるにもかかわらず同じ図書記号が受入れられたとき、アルファベットの順序で前者より後者の方が前の順序に位置するならば 3 をつけて図書記号とし、もし前者より後者が後の位置にある場合は 7 をつける。（第 2 冊目）

〔3〕 その次に、前二者のどちらとも異なる標目にもかかわらず同じ著者記号となる図書が受入れられた場合に、前二者が 5 と 7 となっていて新標目がアルファベットの順序で両者の間に位置するならば 8、5 よりも前に位置するならば 3 をつける。もし前二者が 3 と 5 となっていて新標目がアルファベットの順序で両者の間に位置するならば 4、3 より前に位置するならば 2、5 より後に位置するならば 7 をつける。（第 3 冊目）

〔4〕 以下同様の方法をとる。もしも、5 と 6 との間に位置する標目のものがくれば 5.5 とつける。

7. 5 図書記号展開の実例

図書記号の展開は、著者標目のための展開と図書別の排列順の展開とに分けておこなう。ここでの説明として和書をアルファベット順とした展開例を示す。和書をローマ字綴りとする場合は、訓令式とヘボン式があるが、ここでは訓令式の場合を示す。ヘボン式でも方法はまったく同様である。例として使用した著者記号は日本著者記号表であるが、カッターの著者記号表でもまったく同じ方法で使用できる。

7. 6 標目の展開の実例

（第 1 冊目）

標目が「日本医学図書館協会」（Nippon-igakutosyo-kankyokai）とする。これを（1）とする。展開の方式に従い N77 の末尾に 5 をつけ、N775 とする。（1）の図書記号は N775 と決定する。

（第 2 冊目）

標目が「日本原子力研究所」（Nippon-gensiryoku-kenkyuzyo）とする。これを（2）とする。アルファベットの順序で（2）は（1）よりも先になるので、（2）は端の数 1 と 5 すなわち（1）との間にある。よって（2）の図書記号は N773 となる。

（第 3 冊目）

標目が「日本医師会」（Nippon-isikai）とする。これを（3）とする。（3）はアルファベット順が（1）の後である。よって（3）の図書記号は N777 となる。

第 1 図

注 (1)……受入れた順序

N775……図書記号

(—……)……訓令式ローマ字綴り（Nippon はすべて共通しているので、省略してある）

（第4冊目）

標目が「日本原子力産業会議」（Nippon-gensiryoku-sangyokaigi）とする。これを（5）とする。（5）は（2）と（4）との間にある。よって（5）は N773.5 となる。

これらの図書の書架排列の順序は標目のアルファベット順に並び一定である。これらの図書のそれぞれがどのような順序で受入れられたとしても、展開部分の数記号がそれに応じて変わるだけで、排列は一定である。なぜならば、アルファベット順に基づいて展開部の記号を与えたからである。ヘボン式で標目をとっても、同様にしてヘボン式に基づくアルファベット順に並べられる。この実例として、日本語をローマ字綴りで表わした場合を示したが、欧文でそのまま標目となる洋書は、いっそう展開が容易である。

7. 7 図書排列順の展開について

この目的は、同一標目図書中の図書の排列は書名のアルファベット順に排列し、また巻次を追うものは巻次順に排列することにある。これにより、検索、出納が容易におこなえる。巻次はカッコに入れ表わし、単行図書は前述展開法の展開部数字だけを用いる。

7. 8 図書排列順記号の展開の実例

この記号は、同じ分類記号の図書で、著者が同一人であることが前提である。

（第1冊目）

書名が「蛋白質化学2」とする。まず、展開方式に基づいて、5とする。また、巻標示を括弧に入れて、（2）とする。よって、図書排列記号は、5（2）となる。

（第2冊目）

書名が「蛋白質化学1」とする。よって、図書排列順記号は、5（1）となる。

（第3冊目）

書名が「蛋白質化学入門」とする。この図書は、書名のアルファベット順が、先に受入れられた二冊の図書よりも後になる。よって、図書排列記号は、7となる。

8. おわりに

請求記号は、簡単ならば簡単なほど使用に便利なものではあるが、請求記号が同じで別個の図書があるならば我々は請求記号以外の標識すなわち著者や書名によって、どの図書が求められているかを判断しなくてはならない。また、図書の排列も、著者や書名の文字に依ることになる。これは、単行書において特に不便である。

この展開法は、この不便さを無くするためのものである。そして、洋書だけでなく、和書であっても訓令式あるいはヘボン式に合わせた図書記号どうりの排架が可能である。この著者記号展開法は、日本著者記号表、カッター著者記号表をはじめ、種々の著者記号表でも応用がききます。また、どのような分類法を使用したとしても異標目同図書記号となりえますので、この展開法を適用されると便利かと思われます。